

## 平成18年度 第2回武道研究会報告

### 無敵の探究—複素的身体論

平沢信康\*

平成18年度の第2回目の武道研究会は、学外から講師を招聘し、年度末の2007年3月27日に開催することができた。

お招きした内田樹教授（1950年生れ）は、東京大学文学部仏文科を卒業後、東京都立大学（現在・首都大学東京）の大学院に進み、東京都立大学人文学部助手を経て、現在、神戸女学院大学文学部で教鞭をとっておられる学究である。フランス文学・現代思想が専門で、著書に『ためらいの倫理学』（2001年）、『レヴィナスと愛の現象学』（2001年）、『寝ながら学べる構造主義』（2002年）などがある他、『映画の構造分析』（2003年）や『街場のアメリカ論』（2005年）等の映画論でも知られ、また最近では『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』（2006年）を刊行され、教育論の論客としても活躍されている。さらに氏は合気道6段で、神戸女学院大学合気道部の顧問を務めるほか、居合や杖道（神道夢想流）にも親しんでおられ、文字どおり文武両道の大学人である。以下にリストアップした著書や論文を通じて武道論でも知られており、まさに「知の総合格闘家」と評すべき知識人である。

近年、知的ジャーナリズムの世界で氏の知名度が高まりつつあることは周知のとおりである。ご多忙のなか、今回は、「無敵の探究 複素的身体論」という、いささか難解な哲学的演題のもとに、概ね以下のような内容を骨子として講話いただいた。

冒頭、「敵」なる概念を、武術の対戦相手＝对人的な意味における敵と限定せずに、武術家にとって自分の身体運用能力を下げってしまうもの一般と

して定義した上で検討し、風邪、スキャンダル、天災、家族問題などを列挙した。さらに「武道」と「護身」との概念の異同にふれつつ、武道の錬磨には危険予知能力、危険察知能力が重要であることを指摘した。

武術は、いわば、ある種の情報戦である。すなわち、自分の身体感覚を伝えることなく、相手の身体感覚をキャッチすることが肝要なのである。すなわち、相手を待機状態にさせながら、自分と同じ身体感覚にしていまい、相手の身体を取り込んで活殺自在にできることが、到達すべき極意というわけである。いわゆる達人は、微細なシグナルを感知することができ、いわゆる「先の先をとる」と称して、身体の内側に生起しているものを細かなチェックリスト（通例100～200）に従って、一瞬で補整できる身体運用能力を具えているという。専門的に言うと、非常に細かく「身体を割って」使いこなす力が、武術では大切であると解説された。

武術の「形」稽古では、示された形を「一度見たら動作を覚えよ」と師から訓えられるが、ダンスの世界においても、優れたダンサーは見せられた舞踊の動きを即座に見覚えて踊ることができるそうである。教授が対談された東京大学の某脳科学研究者によれば、その際、脳内のミラー・ニューロン（90年代に発見）なるものが発火するそうである。

内田教授の武道論は、さらに社会的な広がりを見せるところに、その特徴がある。武道が涵養する能力は、道場の内に留まらないとの洞察が、それである。

\*伝統武道・スポーツ文化系 主任

事実、戦国時代に、武芸者が槍一本で武功を立て、やがて一国一城の主になったのは、発信能力と受信能力とを高めることが身体レベルに留まることなく、「戦場における武勲」と「治国能力」が結びついていたからだ、と喝破する。すなわち、武術で培われる資質能力は、政治の世界へも汎用性を有し、統治者能力へつなぐと、観るわけである。

ところで氏は、自身が指導する学生の合気道の合宿体験を通じて、女学生たちの身体の使い方、部員の雰囲気、笑うタイミングなどが、日を追って次第に一致してくることを実感すると語る。武道の修行は、五感や共感能力を高め、共に生きる技術や高度な意思疎通能力を高め、いわば《共＝身体》とでも言うべきものを形成するとの自説が展開された。

さらに敷衍して、集団の視覚・聴覚・触覚情報を利用することができる特異能力に言及した。そうした能力の一例として、あたかも上空からフィールドを俯瞰する能力、すなわち「スキャン」できるアスリートとして、ラグビーの松尾雄治選手とプロ野球のイチロー選手を挙げ、イチローが背走して飛球をキャッチできるのは野球場に集まった5万人もの観客の視覚情報を入手しているためではないか、との卓抜な仮説も披瀝した。

最後に、合気道のように組み合う武道においては、二人で組んだ身体に、個々の身体とは別の「複素的な身体」が形成されるとの持説を紹介した。複素的な身体には、それ固有の法則が成立し、ある種の自由獲得へつながるものがあると、氏の武道論は意味深長なレベルの考察へと発展しつつある印象を与えた。副題の所以である。

その他、挿話として、合気道の植芝師範が、戦時中に陸軍によって合気道が採用されそうになった際、教えるのを止めて田舎に引きこもった話や、触らないで体軸を修正することで身体の歪みを治す有名な治療家（スポーツ選手や武道家が数多く通っている整体診療所を開業）の話が印象に残った。

当日、講義棟205教室には、武道課程の学生はもちろん、芝山学長以下、本学の幹部が出席したほか、講師との縁をとりもって頂いた鹿児島県立短期大学の倉元綾子教授が来学され、閉会の挨拶を述べていただいた。さらに神戸からも大学関係の来場者があったことを附記しておく。

#### 参 考 資 料

内田教授の武道論・身体論関係の著書および論文

##### 著書・共著

- 1) 甲野善紀との対談集『身体を通して時代を読む：武術的立場』バジリコ（木星叢書）、2006年6月
- 2) 三砂ちづるとの共著『身体知：身体が教えてくれること』バジリコ（木星叢書）、2006年4月
- 3) 『身体の言い分』毎日新聞社、2005年7月
- 4) 甲野善紀・黒田鉄山・宇城憲治・前田英樹・松原隆一郎との共著『古武術で目覚めるからだ』洋泉社、2004年2月
- 5) 『私の身体（からだ）は頭がいい：非中枢的身体論』新曜社、2003年5月

##### 雑誌記事・紀要論文

- 1) 〈「型」の身体理論 古武道の教育的契機〉『月刊少年育成』4月号、1994年2月  
古武道における「型稽古」の基本的な考え方を明らかにする。心理的負荷をゼロにした状態での理想的な身体運用の体感を習得させるこの技法が、どのような武道上の難題に応えるものであったのか、またその教育的な応用はどのようにして可能かについて基礎的な省察を行う。（社団法人大阪補導協会からの依頼原稿：武道について書いた最初の論文）
- 2) 「専気致柔 古武道の教育的契機 (2)」『月刊

少年育成』3月号，1995年3月

師弟関係による情報とスキルの伝達の合理性  
ということについての論考。以上の二論文は  
のちに『木人花鳥』に転載。

- 3) 「木人花鳥 武道的身体論」『神戸女学院大学  
論集』第43巻第2号，1996年12月

記号論の知見と伝書の身体技法論を照合させ  
て，武道の術理の合理性を考察。「木人花鳥」  
というのは柳生宗矩の『兵法家伝書』にある  
比喩。「木でできた人形」は花鳥を前にして  
もいささかも心を動かさない。これを古人が  
武道的な身体運用のひとつの理想としたこと  
の根拠を解明する。(荘子の「木鶏」，澤庵禅  
師の『不動智神妙録』，伊藤典膳『猫の妙術』  
などをテキストにして，そこで説かれている  
身体運用を記号論的に解読した。甲野善紀，  
黒田鉄山らの武道ニューウェーブの趨勢に影  
響された論)

- 4) 『非中枢的身体論 武道の科学を求めて』『神  
戸女学院大学論集』第47巻，第3号，2001年  
3月

2000年1月の武道シンポジウム，7月の身体  
運動文化学会の発表，Japan Quarterly の原稿，  
12月の学科別集会の原稿などを集大成した現  
段階での私の武道論の達成点。非中枢的な身  
体運用とは何か？武道の自己否定とは？木鶏  
の逆説とは？形稽古はなぜ消滅したのか？  
これらの原理的な問いに回答。

- 5) 「武運の人」『体育科教育』4月号，大修館書  
店 (2003年4月1日)

- 6) 「古武術からの発想」『別冊ステラ』37号，  
NHKサービスセンター (2003年5月)

